

# 羊を数える教室

至ッ亭浮道

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

髪の毛をくれない？

という言葉から始まった一連の事件

# 目次

第一話

—————

1

第二話

—————

7



## 第一話

「波左間《はざま》くん、髪の毛くれない？」

放課後の教室で、クラスメイトの女子からそう言われた。突然の出来事だった。

発言の気持ち悪さよりも、突拍子のなさの方が気がかりだった。

僕の髪は白い。白髪《しらが》ではなく、白髪《はくはつ》。黒髪の持ち主であるみんなは、電気の下では天使の輪っかを作る。けれど、僕はもともとが白いから、上から電気で照らされても、微妙に光るだけ。

僕がお父さんに抱きかかえられてお風呂に入っている小さいころの写真を見ると、その写真に映っている僕は真つ黒な髪をしている。だから、生まれつき白髪《はくはつ》だったわけではなくて、いつの間にか真つ白になってしまったのだ。

僕がその変化に気づいていないということは、髪の毛は、日に日に、黒から白へと変色していったのだろう。

毎日写真でも撮っていたら変化がわかって面白かっただろうけど、自分が白髪《はくはつ》になつていふことにも気が付かないんだから、写真など何も無い。周りの人には、ただの白髪《しらが》の人という風にしか見えないだろう。

僕の髪を見て、みんなはおしゃれだとかカツコイとかいうけど、望んで白髪《はくはつ》なわけじゃないから困る。

事情を知らない人からは白い目で見られるし、事情を説明しても白々しい反応をされるのがつらい。

どうしても信じてくれない人には、髪以外の毛を見てもらうようにしている。世の中おしゃれな人は多いけど、ムダ毛まで染める人はいないから、そこらへん見るとやつと納得してくれる。

つまるところ、僕は自分の毛の色で相当悩んでいるのだった。

そんな僕に髪をくれ、だど？

僕は、当然、怒った。人が気にしている問題に手を付けられたらそりや怒る。龍が首の下のうろこを触れられるのを嫌がって烈火の如く怒るように、僕は髪について触れられたくない。

けど、まずは我慢だと思った。僕は、目に怒りが宿ってしまったように気をつけながら、女子に拒否の意思表示をした。

「いやだよ。ハゲちゃうじゃん。髪の毛って抜いたらもう生えてこないんだよ？」

「ええ、知ってるわ」

彼女は、周知の事実を語る僕を、見下すように答えた。

どうしてこんなに高圧的になれるのか、わからない。

今、彼女は僕にお願いをする側で、もし僕の髪を欲しているのなら、少なくとも持ち主の機嫌を損なわないようにするべきなんじゃないか。

それなのに、彼女は、僕の言葉を無視した。僕の怒りの感情はみるみると立ち昇り、臨界点をはるかに超え、オーバーフローを起こし、むしろ彼女に対して不可思議な親しみを感じさせた。怒ったところで彼女は何とも思わないだろう。だったら、この異常な要求をしてくる女のことを知ろうと思いつたのだ。

だから逆に考えれば、もし、目の前の女子が、僕に自分を認識させるためにさっきのような返事をしたのなら、彼女は人間関係の天才だと思う。

「それで、私は、あなたの髪がほしいのだけだ」と

彼女は、なお、僕に髪の催促をした。

左手を腰にあて、左足に重心を掛けて、僕の眼前に立っている。彼女は左足から右足へと重心をずらし、重心の移動に伴って髪が少し揺れた。彼女は腰をはるかに超えるぐらい、髪を伸ばしていた。

「どうして僕の髪が欲しいの？ 君に比べて、僕は何の手入れもしてないし、長くもないから売ることまでできないよ」

「売りはしないわ。あなたの髪がきれいだからよ。ただそれだけ」

「きれいだから?」

「そうよ。……ちよつと触るわね」

彼女は、僕に一方的に宣言をすると、僕の頭に手を伸ばした。

僕は身じろぎ一つでできなかった。

女子の手が、僕の額の上ぐらいから髪と髪の間を分け入ってくる。一本一本確かめるように、僕の頭皮とそこから生えている白髪をなぞり、そして頭頂部にたどり着いたかと思うと、頭から手を放した。

彼女の手が離れてから、僕はやつと何かを言うことができるようになった。

「ちよつと! 勝手に触るのやめてよ!」

「だから先に言ったじゃない、触るわよって」

彼女は、一言いえばそれで済むと思っているのだろうか。僕に髪の毛を一本くれと言った時と同じ表情でいた。

当然でしょ?

というような顔つきで突っ立っている。

「だとしても、駄目だって! 第一、汚いよ。佐藤さんの手が汚れちゃうよ」

僕はその時になって初めて、眼前の女子の苗字が佐藤であることを思い出し、より強く文句を言うためにその名を使った。名前を呼ばれると人は無関心ではいられなくな



る。そんなことを以前どこかで聞いたことがあった。

「そんなことは気にしないわ。……やつぱり、あなたの髪はきれいだったわ。白髪とは違って、根元までしつかりと——ほら」

佐藤さんは僕の髪を見つめながら、愛おしそうに眼を細めた。そして、彼女の手に残っていた僕の白髪を一本つまんだ。

佐藤さんは金箔でも取り扱うように丁寧に僕の抜け毛を扱った。

透かして見たり、ひらひらと振ってみたりしている。

僕はもしかしたら馬鹿にされているのかもしれないと思っただけど、現に佐藤さんの熱心さを目の当たりにしているから、その熱意を持ったまなざしを強く否定することもできなない。

真剣なまなざしの佐藤さんに対し、僕は緩慢な視線を向けていたけれど、あることに気がついた。

「そういえば、それも僕の髪だね。それをあげるからさ、これからは必要な用事の時き意外は来ないですよ」

僕としては、僕の人生に二度と関与してくるな、と伝えたつもりだった。しかし、佐藤さんは、

「ええ」

と素っ気ない返事をしただけだった。

わかったのか、わからなかったのかも、よくわからない反応だった。

その反応を見て、今まで忘れていた怒りが沸々と僕の感情の奥底で煮えてきた。

本人の目の前で抜け毛を観察するという所業に対する心理的代償を、要求しようとしたけど、これ以上関係すると、ろくなことがないという本能の導きに従って、僕は佐藤さんのもとから遠ざかった。

佐藤さんは最後に、

「ありがとう。感謝してるわ」

と言った。

「……………えっと、別に」

僕は、その時初めて、佐藤さんが僕の好みの顔立ちだということに気がついた。

こんな腹立たしさを抱えながらも、女の人の顔立ちを見逃さない僕の卑しさが嫌な感じだった。

## 第二話

「屋上に子ガラスが迷い込んだようだが、気にしないように」

その日、昼休みに、先生たちからそんなお触れがでた。

猛禽類に襲われたのか、それともなんらかの怪我を負ったのか。

カラスの子供が一羽、僕のクラスがある校舎の屋上に墜落したらしい。

で、そのカラスが屋上で、親や兄弟を必死になって呼ぶから、かああ、と鳴き声がうるさいのだった。

最初は、なんだなんだ、と珍しい出来事に騒いでいたみんなも、次第にうんざりしてきたらしい。

最終的には、先生たちもしびれを切らして、用務員の人を屋上に行かせた。

しかし、カラスは必死の抵抗。

ここで捕まれば殺されるとでも思っているのだろうか。より一層大声を出して助けを呼ぶ。

トチトチと足を引きずりながら、片翼をかばいながら逃げ惑う。

挙句の果てには、跳べもしないのに屋上の縁に立ったりするから、用務員さんもお手

上げとなった。

その結果、放課後になっても時折カラスの鳴き声がするのだった。

もう、お前の親兄弟はお前は死んだと思っているさ。

僕はそう思った。でも、それだけでは、言い足りなくて、

最後まで一生懸命生きろよ。

と最後に付け加えた。

「なにを考えているの？」

「え!？」

僕は急に声を掛けられて飛び上がった。字義どおりにぴよんと跳んだ。僕は反射的に後ろへと軽くジャンプしていた。ガタガタと机に当たってしまった。日直が綺麗に並べていった机の列が乱れていた。

「……なに、佐藤さん」

僕は乱れた列をもとに戻しながら、視界の端で佐藤さんを捉え、佐藤さんにどうしてここにいるのか聞いた。

佐藤さんは昼間とは違い、髪を一つに結んでいた。

今まで重たそうに垂れた髪で見えなかった耳が露わになっていた。小さな耳が顔の両側面にちょこんとついていた。それなのに顔のバランスがおかしくないのが気に

なった。……そうか、顔が小さいんだ。

「お昼のお礼をしようと思つて」

「お礼……？」

「ええ。あなたから髪を貰つたでしょう？ その時は、私、髪に夢中だったら、あなたに

何もあげなかつたじゃない」

「まあ、そうだね」

「何か欲しいものはある？」

「……いや、特に」

彼女は突つ立ったまま、何が欲しいのか尋ねてくる。一方、僕は、机の対角線の角に手をかけて、腰を微妙に曲げた状態のまま、なにが欲しいのか考えている。僕はそのまま何が欲しいか考え続けた。

意外とすぐにその答えは出た。

「僕も、髪が欲しいよ。佐藤さんの真つ黒な髪」

「そう」

僕は佐藤さんを困らせようと思つて、そう言つたに過ぎなかつた。気の利いた冗談のつもりで。自分がいざ髪を要求されると困るだろうと思つたのだ。

が、佐藤さんはもはや僕らの常識外に属していた。思いつきに過ぎない僕の要求を受

け入れた佐藤さんは、カバンからスティックタイプのはさみを取り出すと、それを180度回転させて、僕に差し向けた。

「好きなかだけ切るといいわ」

「え……いや……」

僕ははさみを受け取ることもできなかつた。答えに貧している間に、佐藤さんは、

「そう。じゃあ自分で切るわ」

と言つて、一つに結んでいる根元のあたりで、じよきじよきとはさみを鳴らし始めた。刃渡りが短く、カット用のはさみじゃないせいでなかなか切れないらしい。

佐藤さんはときどき顔の左側を引きつらせながら、しばらくじよきじよきやつていた。

どれぐらいの間だったか。

シヨキンだか、シャキンだかどちらとも判断できない音がして、僕ははつとした。佐藤さんが髪を切っている間、僕は呆気にとられてしまっていた。彼女は髪を押さえていた右手を、体の前に持つて来た。

彼女の手には、つやのある黒髪の束が握られていた。

「持つてて」

佐藤さんはそう言つて、僕にその束を握らせると、首の後ろに残っている結ばれた髪

の根元から、髪留めのゴムを取って、僕の手元の髪を束を結んだ。

彼女が後頭部から髪留めのゴムを取った時、残っている彼女の髪がふあつと広がった。ぎつしりと詰まったブーケを結びリボンをほどいたときが、こんな感じだったな、と急に親戚の結婚式での記憶を思いだした。

佐藤さんは切り取った彼女の髪を二重に束ねて、それを結び、僕の手に戻した。

「いや……、嘘でしょ……」

「他のものが欲しかったの？」

「なんで切っちゃうんだよ！　女の子に髪は必要なものなんでしょ！」

「だって、あなたは髪が欲しいと言ったじゃない。私があなたにお願いしたとき、あなたは私に髪をくれた。だから、今度は逆。あなたが私にお願いをした時は、私がお願いを叶えるようになってるのよ？」

佐藤さんは、物語の寓意を言つて聞かせるような口調で、とてもやさしい口調で、言つた。

「はあ。」

僕は彼女の言っていることがまるで分らなかつた。

——私はそのお願いを叶えるようになってるのよ？

まるで分らない言葉だつた。僕が彼女に髪をあげたのは、彼女が僕の髪を触り、たま

たま彼女の手に髪が残っていたからだ。つまり僕は、自分の意志で髪をあげたわけではない。

でも、彼女が髪を切ったのは、まちがいなく彼女の意志でしかないし、僕の言葉にそんな拘束力があるわけではない。もし言葉を言うだけで、人を意のままにできるのならそんなに楽なことはない。

「だから、あなたが言ったから、私は髪を切ったの」

なおも、彼女は意味不明な供述を続ける。

「じゃあ……」

「なに？」

「じゃあ、僕が言ったことは何でも本当になるっていうわけなの？」

「それはわからないわ。なることもあるし、ならないこともあるもの」

「意味がわからないよ！」

「私だってそう」

彼女の最後の言葉に、僕らの会話は途切れた。

僕は、意味の分からないことを言って譲らない彼女に、少しずついら立ちを覚えだしていた。

瞬間、僕はもつと悪いことを思いついた。



このいら立ちを押さえるたった一つの方法を。

「……わかった。僕の願いは、佐藤さんがいなくなることだよ。もう関わらないで」

「わかったわ。じゃあ、髪はいらさない？」

「気味が悪いからいらさないよ、そんなの」

「私が悪いっていうの？ 私が自分で髪を切っただけなのに、どうして悪いことになるの」

「……は？」

「だから、あなたが君が悪いって言ったじゃない、今。どうして私が髪を切っただけなのに——」

「それは違うってば！ 僕は不気味だから、人の髪の毛なんていらなんて言っただんだ」  
「じゃあ、私はあなたになにをすればいいのかしら」

奇妙な会話の糸が紡がれ、なぜだか、話は振り出しに戻ってしまった。

彼女は僕になにかを施すことを譲らないつもりらしい。さっさと、どこかに行つて欲しい僕は、意味の分からない対象を相手にするとき特有の焦りの混じったいら立ちを感じながらも、意識のすみっこで、カラスが鳴いているのを聞き留めた。

「じゃあ、わかった。屋上で一人ぼっちのカラスを助けてよ。それが僕の願いだ」

「わかった」

佐藤さんはまた無表情だった。悲しいとも辛いとも思っていないようだった。かつかとして僕に対して、彼女は冷静そのものだった。それなのに最後の最後で「君」と「気味」を勘違いしたりするんだから、変な人だ。

彼女を分析していると、彼女は僕の手から髪を奪い、窓の方へ向かった。

僕が、えっ、とも、はっ、とも言えないうちに、彼女は窓を開け放ち、髪のを外に投げ捨てた。

「何をしたの?!」

「カラスを助けるのよ?」

「君がしたのは不当放棄だ!」

「違うわ。私はカラスを助けるために髪を投げ捨てたのよ。——あなたもわかっているはず」

「わからないって!」

と言った瞬間。

下から、鳥類が羽を動かす時のギシギシという強靱な筋肉の音がいくつも重なって聞こえてきた。そして、があ、というか、かあというか曖昧な鳴き声。それが無数に聞こえてきた。

僕はその鳴き声のヘルツの大きさに驚き、窓から離れ、ぺたんと座り込んでしまった。

窓の外ではカラスの大群が覆っていた。

光は遮られた。

教室が暗くなった。

不気味さに気持ち悪くなった。

僕はカラスに恐怖している。こんな大群が一度に現れるわけではないし、これだけのカラスを静かに待機させておけるはずがない。

つまり、髪がカラスになったとしか思えなかった。

確かによく見ると、カラスの羽の色は彼女の髪の色に似ている気がした。髪は鳥の濡れ羽色とも言うし……いや、まさか。

僕は信じざるを得ない状況を目の当たりにしていたが、どうしても信じることに抵抗感があつた。

そして、なんとかひねり出した言葉が、

「どうして……」

だった。

「あなたが私に髪を切れと命じ、私は髪を切った。私はカラスを助けようと思い、私の髪を投げた。それだけのことよ」

「じゃあ……」

「なに？」

「僕を好きになれと言ったら、君は僕のことを好きになるの」

「それは出来ないわ。私は最初からあなたのことを愛してるもの」

「嘘だ」

「わからないわ」

「だって、理由がない」

「物事にはすべて理由があるの？」

そう言つて、佐藤さんは、おしりを地面にべつたりとつけるように座り込んでいる僕の正面にしゃがみ、僕のでこにキスをした。

「始まりはこの額だったわね」

佐藤さんは、彼女がキスした僕の額をなでている。

「ああもう！ 何が何なんだよ！」

「何でもありなのよ」

「じゃあ、この教室を羊でいっぱいにしてくれ！」

瞬間、教室にあつた机、イス、ありとあらゆるものが羊へと化けた。

僕は気を失いそうになつた。

が、羊に化けるといったのは間違いなく僕で、僕がそう叫んだと同時に教室の物品は

すべて羊に化けた。

僕は納得できなかつたが、ついに納得せざるを得なかつた。

「これが君の言っていたことだったんだ。なんでもありなんだ」

「ええ」

「僕、どうしよう」

「数えればいいんじゃないかしら」

「羊を数えるの？」

「ええ。最初の共同作業ね」

「……」

「羊の毛はよく見ると黒ずんでいるのよね。やっぱりあなたの髪が一番きれいだわ」

「そう言ってくれて、嬉しいよ。……多分、僕はそう思ってるよ」